こどもがまなぶ こどもにまなぶ

～新しい“まなび”のかたち～

認定こども園　こども未来館たかわし

平成30年4月1日に開園した「こども未来館たかわし」は、保護者の就労状況にかかわらず、3歳児から5歳児までのすべ1号認定児（幼稚園）と2号認定児（保育園）の園児が一緒の

北川嗣雄　Kitagawa Tsuguo
羽曳野市長

子どもたちにとって豊かな教育・保育環境を提供していきたい。特に私たち自治体は、その環境づくりをしっかり示していきたい。そういった思いから、保育園児と幼稚園児がともに過ごせる、『こども未来館たかわし』、そして幼小中の学校の枠を取り払った、『はびきの埴生学園』が平成30年にスタートしました。これから当市が目指すべき、より良い環境の“学びの場”について、さまざまな角度からご意見をいただきました。

こども園を肌で感じて

■**北川：**戸田先生には、当市のこども夢プラン推進委員会の委員長として、長年にわたり本市の教育・保育の取り組みをご覧いただいていますが、羽曳野市の印象はいかがでしょうか。

■**戸田：**こども夢プラン推進委員会には、市の職員の方が大勢参加され、かつ市民公募委員も参加されている。このような形のところは珍しいですね。それだけ、子どもたちの教育・保育に力が入っているということだと思います。

■**北川：**松元園長は、**本市初の公立認定こども園「こども未来館たかわし」**の園長として、開園時から携わっていますが、当初からこれまでの様子について、その**特色**も含めてお聞かせください。

■**松元：**開園当時は、初めての3歳児の受け入れ、4歳児は新規入園、5歳児だけが以前の高鷲幼稚園の子どもたち、という状況でスタートしました。**1号認定児（幼稚園児）と2号認定児（保育園児）が同じクラス**で過ごしますが、帰る時間はさまざまです。子どもの動きも落ち着かず、私たちも戸惑いながらも毎日修正をかけていった結果、良い方向に変わっていったと思います。現在、課外授業は、**書き方・算数教室**と**音楽教室**、課内授業は、**E-kids（英語）、体操教室**を行っています。書き方・算数教室では、「姿勢正しく座る」「先生の話は顔を見て聞く」など、受身のお勉強だけではありません。また、E-kidsの外国人教師は、子どもたちの発音をすぐに訂正せず、子どもたちは、何度か聴くうちに「この発音のほうが先生と一緒なんだ」と気づくことができるようになってきています。食事は、1号認定児は家庭からのお弁当です。入園時に羽曳野市がプレゼントした**“つぶたんのお弁当箱”**に詰めていただいています。2号認定児は園から提供する給食で、1号・2号認定児が一緒に仲良く食べています。秋以降には、**食育バイキング**を月1回、親子食育バイキングも年1回、

戸田 有一
Toda Yuichi
大阪教育大学 教育学部教授

松元 伊佐子
Matsumoto Isako
こども未来館たかわし 園長

稲岡 麻美子
Inaoka Mamiko
こども未来館たかわし支援の会 会長

南 良治
Minami Ryoji
はびきの埴生学園 校長

戸川 好延
Togawa Yoshinobu
学校教育課 参与（元高鷲南中学校校長）

金銅 宏親
Kondo Hirochika
羽曳野市議会 議長

学年ごとに実施して子どもたちが同じ食事をしています。

■**北川：**稲岡会長のお子様は１号認定児として４月に入園されましたが、**この園を選ばれた理由**を教えてください。

■**稲岡：**私自身、**ゆくゆくは職場復帰**を考えていたので、こども園を選びました。**預かり保育が利用できる**ので、就職活動やそれに向けての準備がとても順調にでき、非常に助かっています。

■**戸田：**稲岡さんは３歳児の１年目でPTA 会長とはすごいですね。喜びと苦労の両方ありますね。

■**稲岡：**会長になり、園と関わることが増えたので、これまで同じクラスの子どもたちしか分からなかったのが、学年を超えて名前も覚えましたし、声も掛けてもらえるようになりました。そういうところでやってよかったなと思いました。

■**北川：**入園して、お子様の様子や園の印象はどうですか。

■**稲岡：**何もかもが初めてなので、子ども自身が慣れるのに時間がかかりましたが、毎日楽しく通っています。お弁当に関しては、給食施設があるので作ってもらえたら、というのが正直なところですが、そこは幼稚園ベースなので、１号認定児がお弁当を持っていかなくてはいけないことは受け入れられました。子どもは月１回のバイキングを楽しみにしています。親としてもいろんなものを食べさせてもらえるので、非常にありがたいと思っています。

■**北川：**松元園長は今の「こども未来館たかわし」をどう見ていますか。

■**松元：**開園時から、職員のモチベーションは高かったと思います。みんなの思いが同じで、**「子どもたちのために」**というのが一番大きかったです。子どもが安全に遊べ、保護者が安心して預けられる、より良い環境が整ってきたのがこの２年目だったと私は思っています。**教育に自信**を持っていますし、**食育にも力を入れています。**それらが、子どもたちの様子にも表れていて、保護者の方にとって、そこが安心材料になっていると思っています。子どもたちからすると私はおばあちゃんの年代なんですが、孫がいたらこの園を勧めたいですね。

学年を超えた子どもの交流

■**北川：**では次に、**本市初の義務教育学校「はびきの埴生学園」**の独自の小中一貫教育について、取り組みなどを教えてください。

■**南：**平成 30 年度に開校し、**府内ではまだ７校しかない義務教育学校**です。広い意味では小中一貫校に含まれますが、厳密に言うと少し違います。電車に例えると、一般の学校は小学校と中学校にレールが分かれており、車両も別々です。また、多くの小中一貫校はレールは１本ですが、車両は別々です。はびきの埴生学園は、幼稚園を同一敷地内に有する、施設一体型の義務教育学校で、レールはもちろん１本であり、一両の大きな電車に全員が

園児にインフルエンザ予防の手洗い方法を教える、はびきの埴生学園の保健委員会の生徒

同一敷地内に幼稚園も併設される、はびきの埴生学園の校舎

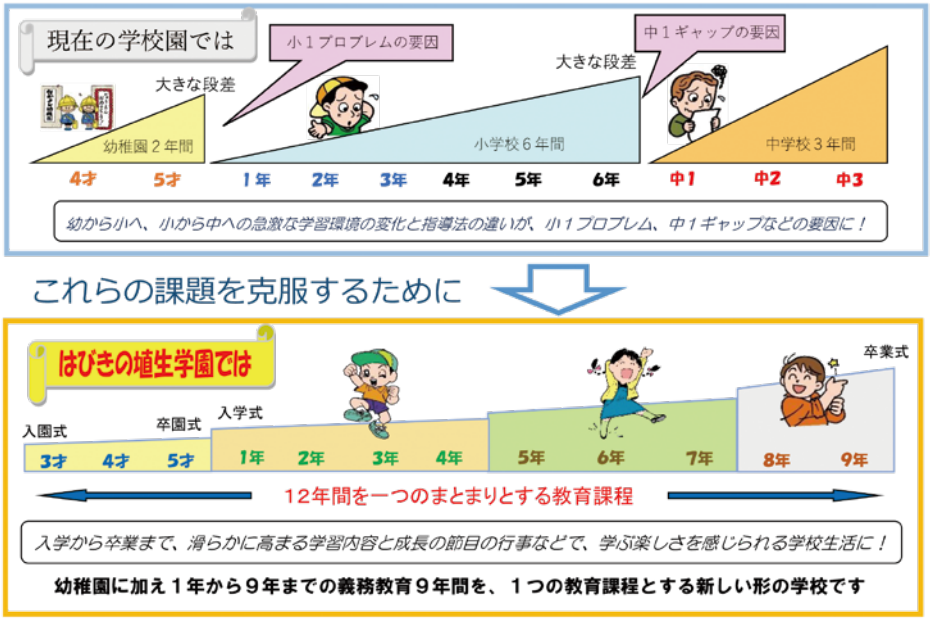
乗っています。本校の強みは、その一両の中で、**全教職員が全ての子どもに関わることができる**ということです。さらに、**埴生幼稚園の３年保育と合わせて 12 年間のスパンで子どもたちに関わることができる**ため、『12 年前の自分と 12 年先の自分が見られる学校』と言っています。

■**北川：**戸川さんは義務教育学校の立上げ当初から、当市の思いをしっかり受けて現場で汗を流されてきました。

■**戸川：**一貫教育は、**「先生が子どもをしっかり見ていくためのシステムづくり」**ではないかと思います。元々あった学校は１小１中の関係だったので、他の学校よりは連携が進んでいると思っていましたが、実際は職員室の中で、小学校、中学校、全く違う学校が２つあるんです。毎日会議をし、システムづくりを進めましたが、**小学校文化、中学校文化の歴然とした差**がありました。そういったなか、義務教育学校をつくるという市長の大きな夢に我々も賛同して、学校を活性化するために、先生方の壁を何とか取り払う必要がありました。「小学校は自分たちが見て終わり。」「中学校では新たな先生が一から始める。」ではなく、**幼稚園も含めた 12 年間を１つのスパンとして考えていける学校づくり**です。最終的には子どものためですが、先生方がどのように子どもを捉えるのかという観点で、義務教育学校は非常に大きな役割を担うことができました。大きな目標でしたが、学校が活性化することで他校区からもたくさん来ていただいて、見学者も増え、非常に良い形になったと思います。

■**戸田：**はびきの埴生学園は、施設の統合をした後に、先生方が仕組みの統合を知恵を結集して頑張られたところが素晴らしい。時間、空間、人のつながりをどうするか、議論をされたと思います。施設という形で出来あがった財産の中で作り上げられた仕組みも財産。またそれをつくる時に先生方の中にできた団結力も財産ではないかと思います。そういったものをこれからどう活かしていくのか。仕組みの先に、今度はどういった内容を入れていくのか。羽曳野には、大阪初の世界遺産という大きな財産があります。英語やプログラミング教育など最先端のことも議会で議論され、また先生方も努力されていくと思います。施設と仕組みの先に、内容をどのようにされていくのか、今後も期待したいですね。

■**南：**義務教育学校ならではの魅力的な取り組みの様子としては、１両の電車に全員が乗っているので、前期（小学校）の児童は、後期（中学校）の生徒に対する**憧れや、見守ってくれているという安心感**があります。後期の生徒は、前期の児童に優しく接し、思いやりを持って関わっています。兄弟姉妹のような関係です。入学式では１年生と７年生が手をつないで入場してきます。これほど**１年生が安心して入学できる環境**はないと思います。そのような、この学園ならではの取り組みが、魅力的な学びとなり、**学年の段差解消**にもつながっていると考えています。先日は前期の保健委員会が幼稚園に行って手洗いの仕方を教え、図書委員会は幼稚園児を本校の図書館に招



義務教育学校 はびきの埴生学園・・・平成 30 年４月１日に開校した「はびきの埴生学園」は、大阪府内で初めて、３歳児保育を行う幼稚園を同一敷地内に併設した義務教育学校です。幼稚園の入園から９年生の卒業まで、12 年間の一貫教育のほか、一定の条件を設定した、他校区の児童・生徒の入学可能な『小規模特認校制度』を導入しています。

こども未来館たかわしで大人気の「食育バイキング（左）」、ボルダリングも行われる「体操教室（中央）」、「E-kids」は外国人教師による本場の英語教室（右）。

いて、お話し会をしました。本校と幼稚園は廊下ひとつでつながっているため、いつでも行き来することができます。そんな環境の中で連携ができることも、魅力的な学校になっていると言えるのではないでしょうか。

■**北川：**これまでのお話を受けて、金銅議長は、本市の取り組みについてどう思われますか。

■**金銅：**私自身の思いですが、幼稚園と保育園の間には確固たる区分があったような気がします。こども未来館たかわしは、**幼稚園児も保育園児もひとつ屋根の下**で一緒に就学前教育を受けていることは画期的だと感じました。私は駒ヶ谷小学校出身で、私の学年は１クラスでした。誉田中学校に入学すると１学年が９クラスあり、自分はみんなと上手く馴染めるのか不安でした。はびきの埴生学園では、年齢差がある小・中学生が同じ建物内で学んでいます。中学生からすると小学生は可愛い存在で、そこに思いやりが生まれます。はびきの埴生学園の施策は、これからの羽曳野市の教育施策としてどんどん押し上げて、さらに充実したものにしていただきたいと思います。

これからの教育ビジョン

■**北川：**現在、はびきのコロセアムの敷地内で、２つめの公立認定こども園、『（仮称）西部こども未来館』の開設に取り組んでいます。幼稚園２園と保育園１園をひとつに、０歳児から５歳児を対象にスタートさせていこうと思っています。また、少子化が進み、各学年１クラスしかない学校がでてきているなかで、いかに良い教育環境をつくれるのか。はびきの埴生学園を道しるべとして、当市の進むべき道をみつけていきたいと考えていますが、戸田先生のご意見をお聞かせください。

■**戸田：**羽曳野市は、**２つのチャレンジ**を同時にされていると思います。１つは幼小中の**「縦につなぐチャレンジ」**。もう１つは、保幼という違うシステムを、年齢が３・４・５歳と一緒というところで**「横をつなぐチャレンジ」**。この両方のチャレンジをこれから先、どのように進めていくのか議論が必要です。子どもたちをどう集めるのか。同年代を集めるのか、異年齢を広く集めるのか。両方頑張っているんですけれど、これをずっと続けるのか。どちらが良いか、模索の時期でもあると思います。

■**北川：**市の西側は、住宅の密集地域、東側は調整区域もあり緑も多い地域です。こどもの数では、駒ヶ谷小学校の生徒数は 90 人を切っており、対して峰塚中学校では 900 人を超えています。偏りがある人口の中で、これからは地域別や学校別で考えていかなければいけないと思います。どう活かしていくべきか、戸川さんはどのような思いをもたれていますか。

■**戸川：**基本的に学校の適正な規模は、担保しつつ、学校が培ってきた伝統や文化、地域との繋がりも大切にしなければいけないと思います。はびきの埴生学園では**小規模特認校**という制度を取り入れ、**校区を区切らない募集**を行っています。これもひとつの解決方法ではありますが、根本的な解決策ではないので、いずれは学校の適正な規模や内容について、特徴的なものを地域ごとに出していく。その特長に応じて、それに向かって進んで行きたいという子どもがいればそちらへの進学を認めるという柔軟な就学指定制度の運用も考えていく必要があります。校

書き方・算数教室（課外授業）で、先生の問いかけに、元気いっぱいに手をあげて応えるこども未来館たかわしの園児たち

区の一部を変更することは、地域との繋がりを大きく変えることになります。反対意見も出てくるかもしれませんが、運用の中で、学校や地域の特色が活かしていけるような形がとれるのであれば、ひとつの方向性として見えてくると思います。現在、はびきの埴生学園では18人の生徒が指定校区を変更し、通っています。環境さえきっちりと整えれば、こういったことも可能だと思います。

■北川：私はもともと、校区を無くしたいという思いを持っています。ただ、どんな形で無くしていくのか。学校の規模を人数だけで適正と決めてしまうのはもう古いし、それでは反対意見もでてくる。**それぞれの地域性を活かした学校園づくり**を進め、それを魅力と思っていただけたら、少し遠くても**校区を越えて**通っていただける。**通わせたい、行きたい、と思える学校園づくり**をしていきたいと考えています。現在、西の地域でこども園と義務教育学校を進めていますが、今度は、東の地域の生徒数の少ない学校で、地域の特性、学校の特長を失わずに魅力づくりができるのか模索しています。夏は緑が多い駒ヶ谷で学習ができ、子どもたちが交流しあえる。市は、移動手段を確保し、子どもたちが年間を通して楽しめる学校をつくることが必要と思っています。具体的にそれを一つひとつ、あせらず、次はどこにするのか、皆さんにも興味をもっていただいて学校づくりを進めていきたいなと思っています。

■戸田：今のお話は、ただ単に学校や園をどうするかということだけではなくて、市全体の中で、どこに集住地域をおき、文化施設などさまざまなものをコンパクトにしていくかという、非常に長期的な見通しも含めての話だと思います。いろんなことを大事にすると思いますが、なにかビジョンがあれば教えていただけたらと思います。点在して暮らすということは、インフラの整備から考えると、将来的には大変難しくなってきます。しかし、一箇所だけに留まると、機能的にも防災的にも非常にリスクが大きい。一定の散らばりはあるが、バラバラというわけではなく、**魅力的な学びの場**をつくり、周りに人々が集まってくる。そんなセンターのような場がいくつかできてくるというイメージだと思います。

■北川：例えば、羽曳が丘地域には、道の駅や小学校、高齢者が緑を楽しめるグラウンド・ゴルフ場、子どもたちが遊べる施設や、医療機関も近くにあります。他の地域でも、住環境を整えながら魅力ある学びの場をつくっていきたいと考えています。議長は、東の地域にお住まいで、地域の魅力はよくご存知ですが、そのあたりの思いはどうですか。

■金銅：駒ヶ谷地域は、市の東に位置し、調整区域で必然的に人口が増加しない現状にあり、減少の一途をたどっています。しかし、小学校を見ますと100年以上の歴史があります。ぶどう栽培が盛んで、賑わいがあった時もありましたが、後継者が少なくなり、人口が減り、小学校の生徒数も現在では、100人を切りました。**駒ヶ谷幼稚園**の園児数は1ケタになり、十分な就学前教育や幼稚園機能などが果たせるのだろうかと不安視していましたが、今年度から**3歳児保育**が始まったことで、現在では19人に増え、**西浦東幼稚園との交流**も始まり、子どもたちの視野が広がったことを、たいへん喜んでいます。羽曳野市は14小学校、14幼稚園が売りでしたが、少子化が進む現状でそれを守り続けることが本当に大切なのかと言うと、そうではないと思います。1ケタの園児数で幼稚園が存続して、本当に子どもたちの就学前教育ができているのかといえば、保護者からすればそれは疑問に思われるはずです。**幼稚園間の交流**によって、多くの子どもたちと接することが必要だと考えます。地区によって人口の差があり、この地区ならば幼小中の「縦」の関係。あるいは、こども園の「横」の関係、と形を分けながら進めていかなくてはいけないと思います。これからは、それぞれの地域の特色を活かし、この学校や園に行きたいと思ってもらえる工夫が必要です。保護者や子どもたちのニーズに合わせた特色を活かした学校園づくりを、羽曳野市にはしてもらいたいと思います。

■北川：それぞれの園や学校の取り組みの事例報告をさせていただき、貴重なご意見もいただきました。まちの将来をしっかりと見据えながら、これからも、**未来ある子どもたちへ大きなプレゼントを届けていきたい**と思います。これからもよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

「お話し会」の様子。園児に絵本を読み聞かせするはびきの埴生学園の図書委員会

新春特集の座談会場になったのは、こども未来館たかわしの「ゆうぎしつ」。これからの子ども教育についての話がされました。